輝く1973年

何のために生きているのか、誰もが一度考えることを私も揺れるヨットの中で考えてみた。

結論は出ない。やがて風がやみ雪になった時、私はその新雪に大きく一歩を踏み出したい。

若いからこそできる何かを見つけるために。

充実した高校生活を！

横越　青木　定男

73年は忙しい一年になりそうだ。というのは、一月から六月までは学校で、生徒会の仕事にかかわることになったからだ。

うちの学校には、伝統の「青陵祭」というものがある。これは、毎年六月に行われる大規模な運動会だ。

その実施には、半年も前から資料を集め、綿密な計画を練らなければならない。

そして、その二週間前頃には、応援練習や、仮装応援（という「マス、ゲーム」みたいなものがあるのだが…）の振り付けや衣装製作で、八時九時まで時には、徹夜で作業をしなければならない。

確かに、疲れるし意義的な面でも疑問がないわけではないが、ある意味で終った後に充実感を味わえるにちがいない。

そしてそれを中心になって計画することも、大変だがやりがいのあることだろう。

そして、四月には三年になるし、大学入試の受験勉強でもまた忙がしい、あわただしい一年になりそうだ。

大地に生きるぞ

横越　阿部嘉寿一

それは、秋晴れのすがすがしい日でした。

阿野川を眼下に、父と母の三人で、一鎌一鎌稲を刈っていました。

私は、この父や母の期待であり夢だったんです。

私自身、物心ついてから〝農業をやるんだ〟という気持が培われて来た様に思います。別に、父や母に頼まれた訳でも強制された訳でもありません。

父や母の夢は、いつしか私の夢に変っていたのです。今は、父も母も私が農業をしてくれる。いっしょにいて、いっしょに仕事をしてくれる。いい息子だと、……それだけで満足していました。

張り切って仕事をしていた父や母も、やはり、秋作業は辛いと見えて、早くも、父から一服の号令が掛かりました。

秋風にほゝの汗を乾しながら、〝あゝいいなゝ〟と思う反面、このまゝでは……。と言う気持ちの焦りが自然と私を無口にしてしまいました。

あお向けに、寝ころんで、麦ワラ帽子を顔にかけると秋風に乗った、青草の香りと汗の香りが鼻をくすぐりました麦ワラ帽子の編み目の間から残暑の強い陽の光が入って、汗に濡れた、まつ毛が七色に輝きました。

〝あゝ百姓はいいな！〟〝おゝ俺はあの陽の光を受けて大地に生るぞ！

青春は二度とこない

沢海　市野瀬儀行

年が明けて切実に感じるのは、やはり、目の前に迫った高校受験。

そして、長い義務教育を終ようとしていることである。

農業にもあたたかい政治の手を

いつも違った期待と不安に満ちた年明けである。

自分の希望する高校に入って喜びや悩みを解決できる精神をつくり、生きがいのある将来を送りたい。そのためにも、わずかな時間を大切にして、残された中学生活を送り自分自身で努力を重ね、希望に向って一歩一歩前進していかなければならないと思う。

目標を定め、それに対して、納得のいくまで考え、ものごとに対処できる力を身につけて、二度とない中学校生活を悔いのない青春にし自分の未来を自分自身の力によって開拓していこうということが、新年の抱負である。

不屈の精神を養なおう

小杉　遠藤　規子

一九七三年、新しい年がやってきた。

月日が経つのは早いもので昨年四月に入学した私も、もう三学期を迎える。

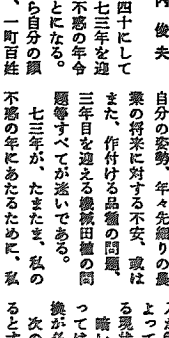
新しい年での輝かしい学校生活、家庭生活をどのようにどうして送っていくかを考えていきたい。

入学して以来、勉強、部活動と励んできた。

そこで今年は、二年生に進級するのを機会に昨年より勉強や体力向上にいっそう頑張りたいと思う。そして一日の疲れや苦しさに負けず、くじけない精神をきずいていきたいと思う。家では、いろいろ心配のかけっぱなしだったけれど、なるべく心配をかけないように心がけていきたい。

また二人の妹とも仲よくしめんどうを少しでもよくみてやるようにしたい。

私は、このようなことに心がけ、一九七三年を楽しく、元気でがんばっていきたいとねがっている。

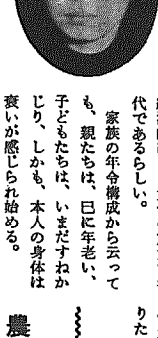


珠算二級を目標

横越小六年佐藤真佐人

一九七三年、小学校を卒業の年だ。もうすぐ中学校へ行く。小学校で勉強するのは、もう三ケ月だ。勉強にも、運動にも力を入れなければならない。下級生とも遊ぶ機会は少なくなる。なるべく親切にしてやって楽しく過したい。

ぼくたちが頑張ってやってきた児童会の活動も、益々発展させるよう、五年生の人たちに、しっかりと受けついでもらいたい。



新年を迎えるとなると、目標が必要になる。目標と一口でいうが、これを決めるのは大仕事だ。四年生の時にも、漢字の練習を毎日三十分やるなど、というのを決めたが、大失敗だった。

こんな出来もしないのを決めては、どうにもならない。

まあ、むずかしいが頑張れば出来るものをやろうと思う。

その一つは珠算の二級をとる事である絶対に！……

四十才にして迷わず

小杉　板内　俊夫

論語の中に人間四十にして惑わずとあるが、七三年を迎へると自分もこの不惑の年令を迎えてしまうことになる。

四十才になったら自分の顔に責任を持てとか、一町百姓の四十代とか、とにかく、四十代と云うのは、社会的にも経済的にも、責任の重大な年代であるらしい。

家族の年令構成から云っても、親たちは、已に年老い、子どもたちは、いまだすねかじり、しかも、本人の身体は衰いが感じられ始める。

だから一番苦しい時代であると農業経済の先生の言葉が思い出される。

村で実施された、集団検診で病気を発見され、県立ガンセンターに入院。二十数日の入院生活を送り、健康の有難さをしみじみと知り、集団検診の有意義を改めて認識し、これの活用の多数あらんことを願う次第である。

孔子は、四十にして惑わずと云っているが、どうして、どうして、激しく変化する社会情勢、どんどん発展し、変り行く周囲の早さに対して、惑わずどころか、なす術も持たないのは、四十になっても、なほ、不勉強のためだろうか。

揺れ動く農政に対処すべき自分の姿勢、年々先細りの農業の将来に対する不安、或はまた、作付ける品種の問題、三年目を迎える機械田植の問題等すべてが迷いである。

七三年が、たまたま、私の不惑の年にあたるために、私事になってしまったが、自分の将来に向かって、迷はず進める基礎の年になるよう頑張りたい。

子どもの成長にとつて遊びの果たす役割はきわめて大きいもの

農家の思いきった転換で安定した家計を

沢海　目黒藤一郎

村で九六三戸の農家がある米の生産過剰を契期として、生産調整が行なわれ、しかも米価据え置き（47年は少し上がったが、農業所得は停滞し46年の農業所得は約18億円（一戸当り一三六万円）となり前年と殆んど変らない結果となった。

今まで米の占める割合が高く、35年では65%が、46年では55%と下り、その反面畜産が5%から18%。野菜が12%から16%と伸びている。

そこで必然的に兼業化の傾向が強まり、46年では兼業収入が67%を占め、この収入によって乗く家計を維持している現状である。

暗いかげりのある農家にとっては、この暗黒いきった転換が必要であろう。

次の点で、その可能性があるとすれば明るい農村へと転ずる事が出来ると思う。

①、米作偏重より脱却し、他作目に転換する。

②、米は良質米の銘柄米とし乾燥をよくする。

③、畜産、野菜、果樹、花きの作付けを増やす。

④、施設園芸を取り入れるとともに不時栽培を行う。

⑤、農作業の協業化の推進。

⑥、農業への意欲の増進。

野菜生産者の安定対策を望む

沢海　佐藤　兼平

横越村は、稲作の集団化、共同体制などは、県内でも先進の地であり、これによって産みだされた余剰労力は乳牛の飼育を始めとし、野菜果樹球根栽培に振り向けられ、特に米と酪農との複合経営は、農閑期の労力を活用した現金収入の道を開いた立派なものと思います。

それに、村当局、農協などの指導育成には深く感謝するものであります。

しかしながら、複合経営での自立農家の育成に、今一番忘れてならないものは、横越村の地域性からみても野菜生産者の安定と育成ではないだろうか。これには、生産作付指導もさることながら、先づ生産野菜安定資金制度を設けることを急がなくてはならないと思います。一口に言って墨落となった場合の野菜に対して一定助成し、常に野菜にも安定価格を保つように維持する必要があります。

新潟もやがては、五十万大都市に躍進、青後地における役村が新潟市民の日常生活への野菜の大供給基地として是非とも野菜造りに はんとうに奔走するよう新年を迎えて寄金できるよう新年を迎えて野菜生産者の安定指導をご当局にご配慮を希望するものであります。